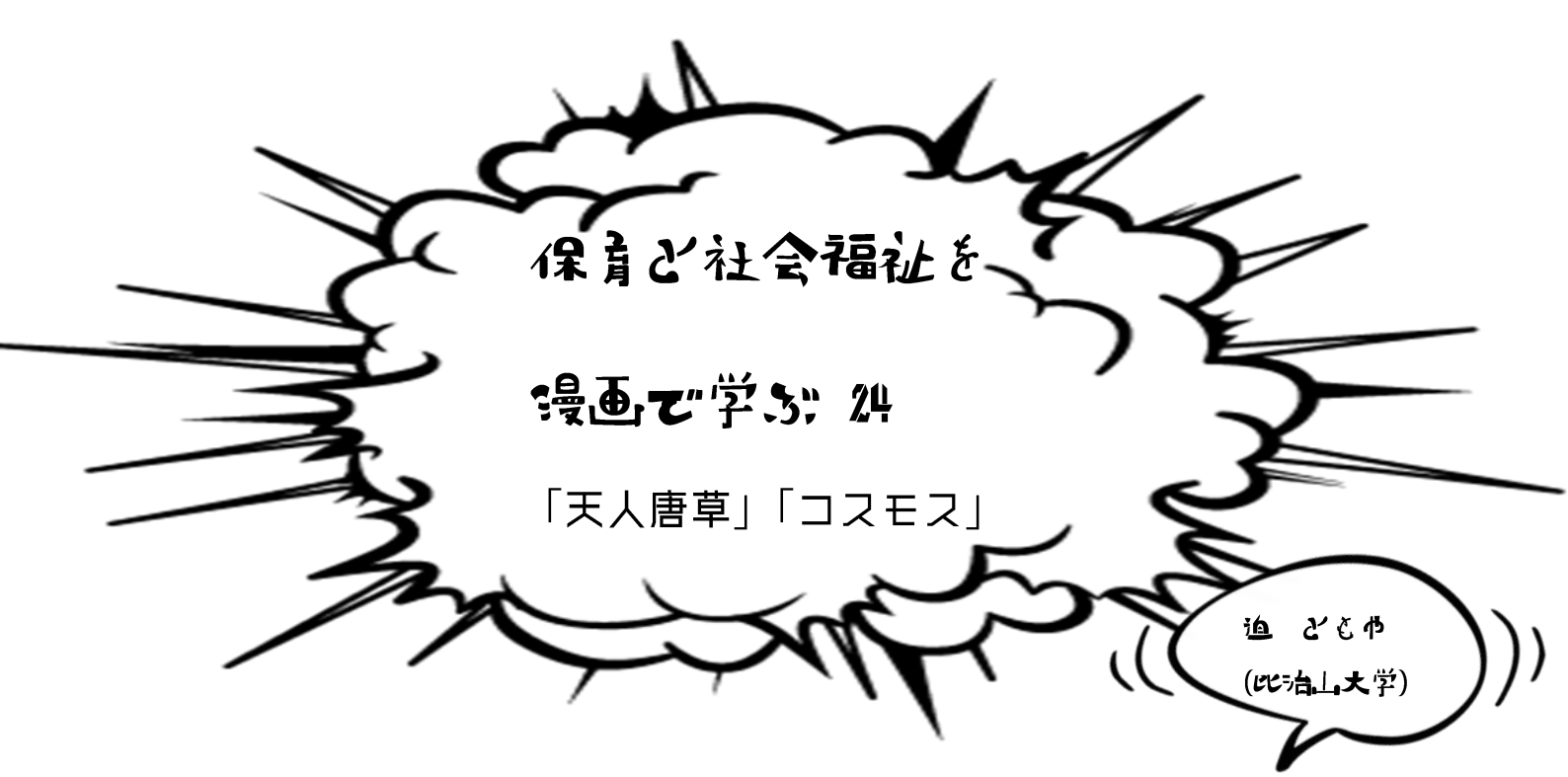




保育と社会福祉を

漫画で学ぶ 24

「天人唐草」「コスモス」

迫 ひとゆ
(比治山大学)

山岸涼子さんの短編ホラー漫画から、親子関係の歪みについて学べる作品を紹介します。

父親と娘の問題を描いた『天人唐草』（1979）、母親と息子の問題を描いた『コスモス』（1987）です。

『天人唐草』

オオバコ科の越年草に「イヌフグリ」という植物があります。春先にピンクの小さな花をつけるのですが、果実の形が犬の睾丸に似ているらしく、この名前がついています。

古武士的な気難しさを持つ厳格な父親から「女性是这样あるべき」と厳しくしつけられた響子。小学生の頃、友達がイヌフグリの名前を笑ったのにその理由を教えてくれず、不思議に思って母に尋ねた。母は「その花は天人唐草とも呼ばれているからそっちの名前の方がいいわよ」と教えるが、響子は納得できない。「テンニンカラクサ」？ 変なの　なんでわざわざそう呼ぶの？　イヌフグリがおかしいから？」

すると父は「女の子がそんな言葉を口にするもんじゃない！」と一喝する。有無を言わせない父の態度。やがて響子は失敗を恐れてやり直すことを怖がる子どもになった。父の言う「正しさ」は響子の理解を超えるものであり、とにかく従わざるを得ないのだった。

中学生になった響子は、父に似て気難しく、まじめな男子生徒に恋心を抱いた。響子は彼の下駄箱にラブレターを入れたが、彼の母親から自宅に電話がかかり「こういうことはまだ早い」とたしなめられる。響子の母親が電話を取ったため、このことは父にも伝わり「お父さんはお前を、もう少しつつしみのある女性に育てたつもりだが、こんなにもませているとは」と響子を叱りつける。父の言葉は響子に強い罪悪感を与えた。男性に対する自然な感情は、響子の中でブレーキをかけられてしまった。

物語の冒頭では、響子の両親は娘思いの良い父親と母親のようです。古風な父親に、母親は三步下がって従うようにしています。父親は、自分のルールを説明しません。「なぜこうするべきなのか」を言わず、子どもは親に従うもの、女性は男性に従うもの、という信念があるようです。強い信念をもつ人のそばにいて、その人の言うことが絶対のようになると、人は自分の頭で考えることをしなくなります。

響子は父親の強い掟の中で生活するようになります。父親の枠に過剰に適応しようとすると、現実の男性との関わりが持ちづらくなってしまいます。高校生になった響子は教科書を忘れて、隣の男子生徒が見せてやろうとするのに拒絶します。意識しすぎて、挙動不審な様子になっています。厳格な父親が望む「女子のあるべき像」は、響子の言動や感情を縛りつけ、ぎこちなくさせてしまうのです。

父親の紹介で役所勤めを始めた響子は、上司からのちょっとした注意を真に受けすぎていちいち落ち込み、はれ物扱いされることに。ただ、同僚の男性、遊び人風の佐藤だけは響子の本質を感じ取っているようです。

「あの子、やりにくいよねー」。上司の陰口を聞いて涙ぐみながら帰途に就く響子は、街なかで偶然、佐藤に呼び止められる。「送ってってやるよ」と勝手についてきた佐藤は、笑いながら「あんたさあ、みえっぱりだよなあ」と言う。響子は驚きと怒りがまじり、強い口調で返す。「みえっぱり？ あたしのどこが！ あたし、みえっぱりな女にはなるまいと心がけて来たはずです。あなたみたいな人に何がわかるの！」「だれもあたしのことなんか分かってくれない。お茶ひとつ満足にいれられない女だって…あたしは一生懸命やってるのに。子どもにでも簡単にできることがあたしにはできない。その苦しみが、あなたなんかにはわかってたまるもんですか！」

響子の気持ちは、いつも抑えつけられていました。理不尽な評価をされたように感じて、思わず反発したことがきっかけで、響子の感情はあふれ出します。このような、思わず感情があふれ出した言葉には大きな意味がある場合があります。言葉を発しながら、自分が言った言葉が大きな気づきをもたらすこともあります。響子が感情をぶつけたかった相手は、本当は誰なののでしょうか。

佐藤は響子を落ち着かせ、「なんでもうまくやれる素晴らしい女だって、あんた言われたいんだよね。誰かにそう見てもらいたい。それが“みえ”なんだよ。他人の目を気にしすぎるんだよ」と指摘します。

響子は自分ではなく、身近な他人の軸で生きています。家族は、身近すぎると他人の軸だと気づかないものです。佐藤の指摘は響子にとって、自分を見つめなおすターニングポイントになるはずでした。しかし以前、母から「送ってくれた人は家まで連れてきなさい。お礼を言うから」と教えられていた響子は、佐藤を自宅まで連れて行きます。玄関から出てきたのは父でした。佐藤の軽薄な挨拶を見た父は、響子に「ああいった若者は好かん」と言ってしまう、響子は佐藤の評価を下げてしまいます。つまるところ響子は、すぐに身近な他人の軸に戻ってしまったのです。

母が亡くなったために、響子は仕事を辞めて家事手伝いになります。見合いもしますが、響子は素直に自分を出すことができずに断られ続け、父から「お前はおとなしすぎる」と言われます。響子は、従順で出しゃばらないことを女性らしさだと信じ込み、その反面で自分を出さなくてよい状態に甘えているようです。しかしもはや、響子を守っているのは父親の強い掟だけです。

父が出張先で倒れたという連絡が入り、響子は急いでかけつけるが、響子が着いたときには、父はすでにこと切れていた。父が倒れたことを知らせたのは、派手な服装で化粧の濃い女性だった。「お父さまにはもう10年近くもお世話になっています」。その口ぶりから、この女性は母の生前から父と関係を持続けていたことがわかった。娘にはこうあってはならないと言いながら、父が男として望んだ女は正反

対だった。響子は信じていた父親の価値観が揺らぎ、愕然として路上をさまよい、見知らぬ男に暴行されてしまう。打ちひしがれた様子に付け込まれたのだ。身も心も傷つけられた響子は路上に座りこみ、「わかってくれる わかってくれるわ きっと…あの人…」と一人つぶやく。しだいに響子は精神のバランスを崩していく…。

「父親の娘」問題というものがあります。支配的な父親が愛する娘の人生を支配してしまうというものです。父親の強い価値観に従う娘は従順であればあるほど、父親の願う家庭的な女性であり続け、婚期を逃してまで親の世話をし続けることがあります。女性自身もそれを望んでいる様子があるために、周囲から口をはさむことが難しくなります。

父親-娘関係が緊密になりすぎると、父親の強い価値観を疑うことができなくなってしまうのかもしれませんが。響子のように身近な他人の軸で生きれば、自分の力で人生を切り開くチャレンジは必要ありません。従順で出しゃばらないことを女性らしさと信じ、父親のような価値観の男性と結ばれれば、響子は幸せを感じられたのでしょうか。

厳格な道徳家のように見える人物が、人に言えない裏の顔を持っていることは、実際にはよくあるように思われます。理想が高ければ、満足できない欲求もあるはずです。本人は裏の顔を誰にも見られなければバランスが取れています。ですが、信じていた父親から裏切られ続けてきたことに直面させられた響子は、父の裏の顔を見てよりどころを失い、誰にも守ってもらえない状態になります。父親の虚像が崩れ落ち、無防備にさらけ出された響子。「あの方はわかってくれる」という「あの人」とは誰なのでしょう。それは響子にとって実際の父親ではなく、理想化された父親の幻なのかもしれません。

一方、『コスモス』（1987）では「母親と息子」のパターンが描かれています。

『コスモス』

「ぼく、秋がキライ」とつぶやく少年、裕太は、すきま風の音を聞くとドキッとする。喘息のある裕太は、自分の胸も同じ音がすると思う。家族は、裕太をかがいがいしく支えるママと、疎遠になってしまったパパの三人。パパは普段から帰宅が遅く、裕太の喘息がひどくなると、ママはパパの会社に電話する。

ある晩、雨戸が音を立てるほどの強い風が吹き、ママは裕太に心配そうに声をかける。「嫌ねこの風。裕太ちゃん、胸、大丈夫？」。ママが不安そうに見ている。風の音とママの表情が裕太の喘息をひどいものにした。

裕太の喘息が苦しいとき、ママが電話してようやくパパが車で病院に連れて行ってくれるのです。裕太は「パパは僕が苦しい時だけやって来る」と思います。ぜんそくの発作で寝込む裕太の顔を見てママは「代わってあげたいわ」「裕太ちゃん可哀想に」と言います。

実はパパには別の女性がいるのですが、ママは「絶対に別れない」と強く思っています。

クリスマスの日、ママは七面鳥を焼いた料理を作り、「大成功なのよ」と得意顔。しかし、パパはやはり帰ってこない。仕方がないので裕太とママだけで食べはじめるが、裕太はまずいと感じてしまう。香辛料が多く、大人向けの味付けだったからだ。

ママは悲しそうな顔で、無言で立ち上がり、せっかく焼いた七面鳥を裕太の目の前でゴミ箱に捨ててしまう。涙ぐむママを見て、裕太は自分が泣かせてしまったと慌てる。「その夜は僕もママも泣いて、クリスマスはメチャクチャだった」…。

パパは年末にも帰ってこない。喘息に苦しむ裕太を寝かしつけ、ママは会社に電話をかける。「年末だからといってる場合ではないでしょう。裕太が苦しんでいるんですよ。わたし一人じゃあの子を病院にだって連れてゆけませんわ」。

パパと別れたくないママにとって裕太の発作は、パパの会社に電話をかけて「帰ってきて」と言い立てるのにとっても都合がいいのです。裕太を顧みないパパを、ママは責め続けます。「あなたはそれでも人の子の親なの！」と。

喘息の発作などで、周囲の気を引きつけるのに都合がいい場合に起こるものがあります。幼い子どもを例に考えてみましょう。弟や妹が生まれたとき、下の子に親の気持ちが向いてしまいます。そのとき、きょうだいの上の子が無意識的に喘息発作のような咳を繰り返して、親の気を引こうとする場合があります。本人はわざとをしているとは思っていません。ですが、結果的に親の気持ちを自分の方に向けることができると、発作は収まります。

病気になった方にメリットがあるとき、人は「自分から病気になる」ことがあります。疾病利得と呼ばれています。幼い子どもなら赤ちゃん返りがあります。小学生くらいの子でも、裕太のように気持ちの影響から発作を起こすことがあります。

疾病利得の裏側には、家族や友人の注目を浴びたい、愛情を受けたいという願望があります。「自分から病気になること」なら構造は単純ですが、第三者の目を意識する作為が複雑になると、「家族の誰かを病人に仕立てて世話をする行為」が生まれます。被害者の飲食物に薬物を混ぜるなど、こっそり虐待したうえで、体調不良の家族を介助している様子を見せて第三者の注目を集めるのです。このような状態には「代理性ミュンヒハウゼン症候群」という難しい名前がついています。ミュンヒハウゼンとは、ほら吹き男爵のこと。演技的な状態を生き続けることを「ミュンヒハウゼン症候群」、身近な人を病人などに仕立て上げることを「代理」と呼んでいます。

裕太のママが、裕太をわざと喘息に仕立てているのかどうか、確定的ではありません。しかし裕太が喘息を利用して、パパの行動をコントロールしようとしていることは読み取れます。母親の思いのままに喘息発作を起こしてしまう裕太は、自分の力で人生を生きる力を奪われ続け、母親に依存させられ続けます。

夏から秋の季節の変わり目に喘息がひどくなり、ママが心配そうに言葉をかけるから、裕太は「秋が嫌い」です。タイトルの「コスモス」は、ここから付けられたのでしょうか。しかしもしかすると彼は、どの季節も嫌いになるかもしれません。

『天人唐草』と『コスモス』、二つの作品を読み比べると、父親と娘、母親と息子の病理のパターンを見ることができます。典型的には言葉による直接的な支配と、感情による間接的な支配のように思われます。こうした親子関係のゆがみから抜け出すきっかけはどこにあるのでしょうか。『天人唐草』では、

響子が同僚の佐藤から「みえっぱり」と言われた場面、そして深刻な被害を受けた暴行の場面であり、『コスモス』では作品に描かれてはいませんが、やがて裕太に訪れる思春期がそれにあたるでしょう。

「僕はどうしてもママが心配するたびに喘息になるんだろう？」 裕太が自力で答えを見出すためには、親子の密着した安全圏から抜け出す必要があります。『天人唐草』の響子は、そのタイミングを逃したのかもしれませんが。彼女が自力で立ち上がり、他者の軸にすがらなくてもよい状態になるには、時間がかかるように思われます。

紹介作品：

山岸涼子（1994）「天人唐草」『天人唐草 自選作品集』文春文庫ビジュアル版（初出：1979）

山岸涼子（2003）「コスモス」『パイド・パイパー』メディアファクトリー（初出：1987）

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com